

板東所長を偲ぶ

国際経済労働研究所 専務理事・統括研究員 八木 隆一郎

私にとっては名誉顧問や会長ではなく「板東所長」です。私が研究所に着任した時から所長だったからです。典型的なモラトリアムで大学院にいた私は、まさに師匠である廣田君美教授に地図を渡されて、当時堂山町にあった研究所を訪ねました。いわゆる“アジト”的な佇まいだと感じたのを覚えています。最初は大学の研究室に在籍しながら統計的分析を担当する研究員という位置づけだと理解していました。板東所長は専門（経済学）の近い先輩研究員たちには厳しい指導をされていましたが、私に対しては、分野の違う社会心理学が専門だったからか、孫世代だったからか、何も強制された記憶がありません。本当に自由でした。そういえば人材観でいうと「来るもの拒まず去る者追わず」とよくおっしゃっていました。経緯はいろいろあるものの、入所してすぐ第28回共同調査（ON・I・ON）を任せられ、その2年後には、いわゆるON・I・ON2（第30回共同調査）がスタートします。相談にはいつも応じてもらえるけれど、最終的には「やりー」と促される。何か制約を感じることはなく、まさに慈父のような存在でした。大きな失敗も数々あったのに、叱られたことが一度もありません。「仕方ない」と、やさしく諭すだけでした。それまでも研究事業は任せられていましたが、板東所長は私が34歳の時に常務理事にします。事業展開は変わらずまったく自由でした。板東所長があ

って現在の労働調査運動や研究所がある訳ですが、板東所長なくして今の研究所の社会心理を中心とした事業もないといえます。

板東所長が関西労働調査会議を社団法人労働調査研究所として改組し創立したのは、なんと29歳の時（肩書は常務理事）です。それで現在の労働調査運動があり、私についても長期にわたって自由に任せられたからこそ、社会心理研究事業部を中心とした事業展開があります。私はそれに倣い、悲願の経済学の事業部を再建するにあたって採用した研究員に事業を任せましたし、研究所の次代の体制を一挙に二世代若返らせる方針なのもそのためです。

近年は直接お目にかかるお話しする機会が少なくなっていましたが、それでもその折は、研究所の現況を報告するのは楽しみでした。任せたのは間違いではなかったと思ってもらいたくて。そして、研究所創立75周年記念企画として「調査運動と板東慧の軌跡」を総会とあわせて開催する時にも、いろいろと報告するのを楽しみにしていましたが、私が急遽入院することになり総会当日は欠席してしまいます。その代わりに、そろそろ今年こそご自宅に訪問したいなと思っていた矢先の訃報でした。そのことが、どうしても悔やまれてなりません。どうしてもあれこれ報告したかった。あのいたずらっぽい板東所長独特の笑顔で聞いてほしかった。